

活けるキリスト夏期聖会（箱根）

主の祈り

——マタイ第6章9～13節——

1976年7月25日

小池辰雄

キリストは祈りのひと 神の子・神の僕 人格神・霊神 キリストの十字架が天への門 「霊」と「肉」 父子の道 聖霊にあつての四大 焦眉の問題は聖霊が今欠けていること 幕屋構造 「主よ」と祈る 南無キリスト 十字架で私はすつ飛ばされている 根源現象 茶道の極意の境地 無者 幸いなるかな、霊の貧しき者 三日月即満月 天道が地路に即する 聖なる者は熱き愛を持っている 聖霊のバプテスマ 御意を私を通して成してください 魂はキリストの霊気を吸って生きている 聖意体現 御意に従って生きる者を神は飢えさせない 砕けの極致は十字架 天然霊然の世界 全宇宙を庭にしているような気持 神中心、神一切 一極絶対 自分自身が聖書になって天国へ 天界と現実界と地獄界

【マタイ6】

9 この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。」

10 御国の来らんことを。御意の天のごとく、地にも行われん事を。

11 我らの日用の糧を今日もあたえ給え。

12 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え。

13 我らを嘗試に遇わせず、悪より救い出したまえ」

●キリストは祈りのひと

「主の祈り」というわけですが、昔、『聖意体現』（1959年、曠野の愛社刊）という題で「主の祈り」のことを書いたことがある。これを復習するわけではありません。ある牧師さんが、「こんな主の祈りの解説は初めて読んだ」といって驚いてくれたことを覚えています。

キリストはどういうひとであったか。これはもし一言でいうならば、

「祈りのひとであった」

といえる。この福音書の、キリストの言葉もまたその行為も、すべてこれは祈りから発している。祈りの実存なんです。そういう意味において、主さまは祈りのひとである。いわゆる「主の祈り」というのが、なにもキリストの祈りのサンプルでもないので、キリストの祈りは、この「主の祈り」の奥にある。マタイ伝11章25節に、



「²⁵その時イエス答えて言いたもう『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者、慧き者にかくして嬰兒に顕し給えり。』²⁶父よ、然り、斯の如きは御意に適えるなり。』²⁷凡ての物はわが父より委ねられたり。子を知る者は父の外になく、父をしる者は子また子の欲するままに顕すところの者の外になし。」（マタイ11・25～27）

これは非常に大事な言葉です。キリストが、

「天地の主なる父よ、われ感謝す」

と祈られた。何を感謝されたかというところ、

「²⁵その時イエス答えて言いたもう『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者、慧き者にかくして嬰兒に顕し給えり。』²⁶父よ、然り、斯の如きは御意に適えるなり。』²⁷凡ての物はわが父より委ねられたり。子を知る者は父の外になく、父をしる者は子また子の欲するままに顕すところの者の外になし。」（マタイ11・25～27）

小さき者に顕したと。また、

「²⁵その時イエス答えて言いたもう『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者、慧き者にかくして嬰兒に顕し給えり。』²⁶父よ、然り、斯の如きは御意に適えるなり。』²⁷凡ての物はわが父より委ねられたり。子を知る者は父の外になく、父をしる者は子また子の欲するままに顕すところの者の外になし。」（マタイ11・25～27）

と、「我を受くる」と言われた。「信ずる」とは言われなかつた。「受ける」とは、全存在をもつて受けとること。「信ずる」という言葉がややもすると躓きになる。ある事柄を信ずるようなことになる。

「神が在る」

ことを信じてみたり、

「キリストは十字架の贖いをした」

という事柄を信じてみたり、そういったのが普通の信仰です。観念信仰というのがみんなそれです。ところが、全存在でからだで受けとる。それが

「²⁵その時イエス答えて言いたもう『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者、慧き者にかくして嬰兒に顕し給えり。』²⁶父よ、然り、斯の如きは御意に適えるなり。』²⁷凡ての物はわが父より委ねられたり。子を知る者は父の外になく、父をしる者は子また子の欲するままに顕すところの者の外になし。」（マタイ11・25～27）

ということ。

今の現代人は利口すぎる。よく、感話会で話を聞いていると、頭の空転をしている場合がかなりある。それから、余計な悩みをしている。これはどういうことからきているかというと、結局、幼な心にならないからです。バカにならないければ。私は、「大学教授」とか「校長」とかいいましても、本当にバカなんです。単細胞だから、信仰の世界が簡単です。本当に全存在で、自分の判断、知情意のいろんな作用を乗り越えた、超我ということ。自分自身を何かかんかと考えているうちは、また顧みているうちはダメなんです。

幼児は遊ぶ時に、本当に自分を忘れてうちこんでいます。あれが幼児の姿です。ドイツの詩人のシラーが、

「人間は遊んでいるときに最も人間らしい」

と言っています。これは遊んでいる時にいかにも全存在が打ち込まれているから、そこに本当の人間らしさがある。学ぶことも本当に遊ぶということ。私は学遊一如と言いますけれども、すべて分裂している事態がいけない。ドイツ語で「疑う」「Zweifeln(ツヴァイフェルン)」という言葉は、「二つに割れる」という字です。「疑う」というのは「二つに割れる」と



いう言葉です。

即ち、私たちの気持が一つであることが大事です。そういたしますと、

「それでは心を澄まさなくてはいいかん」

と、また苦しむ。そんなことを苦しむことはない。たとえば、

「私はかたくなだ」

とか、

「私はどうもまだ分裂している」

とか思う。分裂していても、頑なでもいいですよ。そのまま投げ出す。これが本当の「幼児」^{おさなご}なんです。なにか純粋性とか、真実性とか、唯一性とか、そういったようなことを自分の方で自覚して何かしようとしたら、これは苦しくなる。あるがまま、現にあるがままを投げ出す。どこへ投げ出すか。キリストの中へです。「己を捨てろ」という言葉がよくありますけれども、キリストの中に捨てればいい。イエスキマの中に自分を捨てる。これが本当の「受けとる」ということです。この呼吸がわかったらもう…(異言)…、楽なんです。この事態が本当に大事なことです。

●神の子・神の僕

「天地の主なる父よ、われ感謝す」

と。「主なる父よ」とキリストが言われている。第二イザヤ書は、旧約聖書の最高峰あるいは最深の深淵といつてもいいですが、イザヤ書の40章から55章までの第二イザヤ書に、「エホバの僕」の歌があります。42章を開きましょう。

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭にきこえしめず。また傷める蘆をおることなく、ほのくらしき燈火をけすことなく、真理をもて道をしめさん。かれは衰えずして喪胆せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。」(イザヤ42・1～4)

この第1節です。

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり。」

と。このイザヤ書というのは楽しいですね。「僕」というのは、主人の言いつけを、「はいはい」といつて守る。それに従う。聞き従っていく。それが僕のすがたです。だから、パウロはキリストに捕まえられてから、

「我はキリストの僕である」

としました。この「僕」ということは、もちろん比喩的な表現で、神の意志を現す――



いわゆる単なる奴隷ではないけれども、言葉にこだわらないようにしていただきたい——即ち、使命的な存在なんです。父の意志を、神の意志を行ずる。これが使命的存在としての「僕」。キリストはやはりその意味において、イザヤ書のこの「エホバの僕」の事態をはつきりと身に受けとられた。

「私の意志ではない。あなたの意志を」

というのが、彼の祈りの、貫いているところの、一番奥底の基調であります。そのことが同時に、イエスにとっては、「父と子」の関係。これは同質関係、存在関係です。だから、

「神の子である」

ということと

「神の僕である」

ということとは、キリストにおいては全く一つ。存在的な表現と使命的な表現が一つ。存在即使命、使命即存在というような事態がこのキリストの在り方です。

ヨハネ伝4章のサマリヤの女との会話のところでも非常に大事なことが言われている。

「神は霊である。だから、拝する者も霊と真をもつてせよ」(ヨハネ4・24)

と。またもう一つ、「父」ということをそこでやはり言っておられる。

「この山でもエルサレムにもあらず、汝ら父を拝する時きたるなり」(ヨハネ

4・21)

そういう、

「霊的な存在である」

ということと、

「人格的に父と呼ぶ」

ということがまた離すことができない。霊神・父神ということとです。

●人格神・霊神

モーセの十誡——あれはモーセの「十言」ですけれども、「十誡」なんていう訳は本当はまちがいです——その十の言葉の最初に、

「汝、わが顔の前に何ももの神とすべからず」

とある。あれは、

「汝にとつては、わが顔の前には、他の神々はあれどもなきがごとし。他の神々は

ないんだぞ」

という意味なんですよ、本当のヘブライ語は。他の神々は認めている。けれども、

「私の顔の前には、他の神々はないんだ、お前にとつては」

という一対一の関係を言っている。これは人格関係なんです。

それから第二言では、



「己のために偶像を刻んではいかん」

と。だから、これは霊神なんです。モーセの十言の第一と第二は、この人格神また霊神と
いうことが自然に語られている。十言のなかで、たとえば、

「汝、殺すなかれ」

とある。あの「なかれ」「ロー」というのは断言的な否定なので、

「汝は殺人はしない。お前は殺人はしない。私がお前の神だから、お前は殺人なん

かできるはずがない」

というのがあの律法の根本精神です。「殺すべからず」ではない。私に言わせると、あれは
どの聖書も誤訳している。「殺人せず」または、「殺人せじ」ということ。終わりの方に、

「我は汝の神なり」

という言葉が出ています。そういう、神さまの方から信じかかっているんです、イスラエル
の民に、また一人びとりに。神さまが私たちを、このしょうがないやつを信じてくださっ
ている。それだから、その信に感激するのが信なんです。また、

「お前を捨てない」

という愛によって感激するのが愛なんです。

私は、無教会時代に、この「神を愛せよ」ということが、

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、汝の主たる神を愛せよ」

というが、「愛する」といったって、これは無理でね、どうも苦しくてしょうがない。

「どうしたら神を愛せるだろうか」

と。一時的には愛したような気持にもなるけれども、ダメなんだ。これは聖霊がきてから、
愛の御霊がきてから、初めて「愛する」ということが自然になってきたわけです。

「わが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ」

と。これは申命記にも書いてあるとおり、イスラエルの民は立派だから、大きいから、選
んだのではない。これは

「頑なで、小さくて、しょうがないやつだから、お前たちを選んだ」

ということが書いてある。頑なな民でどうにもならんと。

●キリストの十字架が天への門

キリストが、

「幼児に顕したまえり」

と言う。祈りの世界で大事なものは、この幼児のところです。単純な、自分自身をあるがま
まに投げ出すところ。「祈る」とは、私は「祈り入る」「祈人」という。祈り入らなくては。
祈って入っていかなければ、祈りが祈りにならない。イエスはもう始めっから神さまの中
に入っている。



「神の懐にいた独子」

とヨハネ伝の始めに書いてある。懐の中にいる。日本人にはこの「懐」という言葉が非常にあう。この頃は洋服で、懐がなくなってしまったけれども。

「神の懐におられるところの独子」

という。キリストは、この中に入っている。「神・キリスト・我」の大小の三重の内接円の関係です。キリストは神の中に入っている。我々はキリストの中に入っている。神さまの中にキリストが入って、そのキリストの中に私たちは入ってしまう。これが

「自分をキリストの中に捨てる」

ことなんです。祈り入ること。

キリストは、

「どうでなくてはならん。どうでなければ祈ってはいかん」

とは絶対に仰らない。むしろ、

「構えたらダメだよ」

と。だから、私は「真実」ということを言いたくない。これは「砕け」です。むしろ始めの姿は「破れ」です。我々はみんな整ったような顔をしているけれども、みんな破れの存在ですよ。破れたやつよ。心もからだも破れている。

それだから、この中に門がある。キリストの中に入る門がある。これ（門の中に十の字）は漢和大辞典にも出ていない。この字は私がつくった字だから、門構えに十字架の字は。

「我は門なり」

という、キリストの十字架が門なんです。十字架の前に本当に平伏してこの門の中に入っていく、その先は燦々たる御霊の世界です。祈りとはこの十字架の門から入っていくこと。開かれている門だから。しかしながら、

「叩けよ、さらば開かれん」

とありますね。これは手で叩いたってダメですよ、全身でぶつからなくては。さっきから言っているからだで体当たりです。そしてぶつ倒れる。ぶつ倒れると、どっこい門はもう開いていたというようなわけです。そういうのが、このキリストへの祈りの態勢なんです。何かお願いするのではない。まず入らなくてはダメですよ。入ってからお願いしてください。入らない前に、

「こういうことをお願いしよう」

なんて、それは我欲的なお願いに、御利益的なお願いになる。入ってからお願いするのは、もうみな霊的な角度になる。

●「霊」と「肉」

キリスト中心を「霊」という。自己中心を「肉」という。どんなにそれが立派であっても、



人たちに「ああ素晴らしい」といつて褒められても、自分中心のものを「肉」といいます。キリスト中心のものは、どんなにダメであっても、これは「霊」なんです。パウロが言ったこの「霊・肉」のいちばん深い――パウロはいろんな使い方をしますけれども――分け方はそういうところにある。キリスト中心か――「神」とはいいませんよ――

「キリスト中心か、己^{おのれ}中心か、のどっちか」ということ。

この世の文化文明は自己中心であるかぎり、これはぜんぶ滅びていきます。キリスト中心で花咲いていく文化文明ならば、それは榮えていく。20世紀はあぶない。根つこの世界は本当の宗教、福音の世界です。幹は道徳。枝と葉と果は文化文明です。文化文明は、研究し観察し、いろいろ見ることができるところが、宗教の世界は見えない。根っこを掘り出したら、どういうことになるか。枯れてしまう。見えない世界を本当につかんでいくのが、これが宗教の、また本当の福音の世界です。

「宗教は文化の一つの現象だ」

なんてみんなやっているけれども、そうではない。そんな宗教だったら本ものではない。学校でも私は大胆にそのことを語っています。今は学校で、小学校から大学にいたるまで本当のことを語っている先生が^{あかつき}暁の星ほどいるかいなかだ。だから、日本の教育はもう本当にあぶない。どんなに制度を変えようがダメです。また、教育内容をどういうように工夫しようが、結局最後のところがダメなんだ、いちばん奥が。

だから、会場に文部省の役人がいたって、私は二千何百人の校長会議で、

「校長さんがた、山へ籠もって冥想し祈ったらいかがですか。そこから始まる」

と、三度叫んだ。それでもう止めたんだ、三度言ったから。とにかく、「小池」というのは変わり者にされていますから。だけれども、どっちが変わっているかというわけだ。

こういう構造であるので、皆さんが本当の教育者なんです。教育はもういわゆる学校に任せておくわけにはいかない。皆さんの家庭の教育、これがいちばん大事です。

●父子の道

主の祈りの自分の訳を読ましてもらいます。

「9. 天にいます私たちのお父さま、あなたの御名が聖として崇められますように。」

10. あなたの御国がきますように、あなたの御意が成しとげられますように。天においてのように、地においても。

11. 私たちの日用の糧を今日も私たちにお与えください。

12. 私たちの負い目を私たちに対しておゆるしください。

私たちに負い目ある者を私たちがゆるしましたように。



13 私たちを試みにつりこまないでください。

私たちを悪しきものから救い出してください。」（マタイ6・9～13、私訳）

これを全部これから講義しようなんて、そんなことは思っていない。この

「在天の我らの父よ」

という、今の若い人たちは、

「いつたい『お父さん』なんて、なぜそんなことを言うか。それは神話的な表現で、

お伽話ではないか。むしろ仏教的な『凡^{ほん}』とか何とか言った方が本当ではないか」

なんて思うわけです。ところが、この聖書は神さまを、霊神を、人格神としての神さまを大胆に表現している。神さまの息だとか、手だとか、足だとか、顔だとか、と言っている。けれども、何か偶像に造るかとおもうと、絶対に造らない。これが大事なところ。表現は、我々人間にいちばん身近なじかじかな親しい表現で「お父さん」という。それは親子の関係。ですから、福音は、聖書の世界は、実は孝道なんです。

民主主義だというと、「孝道」なんていう言葉はもう古くさくて、そんなことを言うのは、

「小池先生は明治の人間だから仕方がない」

なんて、そうではない。孝道師道というものは、本当の民主主義とは絶対に矛盾しない。むしろ、これがなければ本当の民主主義とはならないと私は言いたいくらいです。民主の前に「神主」なんだから。民主なんていつて、神さまを忘れてしまつて民主なんていうのはこの神主を——これは神主^{かんぬし}ではないですよ——この神主^{しんしゅ}を忘れた民主なんてものはダメです。

「人民の人民による人民のための政治」

(government of the people, by the people, for the people)

という、あのエイブラハム・リンカーンの有名な三分間演説に

「アンダー・ゴッド」「神の下において」

と書いてある。

「この国に神の下で自由の新しい誕生を迎えさせるために」

と。リンカーンはちゃんとその自覚でもって言っている。

クラーク先生も、

「キリストによつて、青年よ、抱負をいだけ」

と言ったという。普通、そのいちばんの元の「神・キリスト」を忘れている。

キリストは神を父として、自分を子として自覚しておられた。父子の道なんです。父子の道は孝道ではないですか。だから、孔子・孟子の教えをもうひとつ根底からこれを生かすものは福音なんです。私は今、孔子・孟子なんかを読むとおもしろくてしょうがない。これをもうひとつ奥から読むから。

もう福音をもつていると、何を讀んでも、それに味をつけたり、それを更に展開したり、



その奥を読んだりできる。

「信仰をもつと何か考えが狭くなる」

なんて思ったら、とんでもないですよ。無限無量ですから。

だから、私は「無教会主義」というのは嫌いなんだ。なぜ主義なんて言うかと。福音をなぜ主義化するか、イズムに。党派根性、イズム根性の「主義」を超えなければダメです。それは「無教会」は、歴史的には或る意味があつたさ、その時点においては。けれども、いつまでもそれを墨守していたらどうにもなりません、乗り越えなければ。本当のプロテスタントというのは、自分を乗り越えるのがプロテスタントです。カトリックにプロテスタントするのではない。いつも自分にプロテスタトして、自分を乗り越えて、限りなく進んでいく。限りなく上昇していく。これが本当のプロテスタント。これが本当の福音の世界です。

●聖霊にあつての四大

「主義」なんていつたら、気持が狭くなつてしまふ。大自然を見てください。大自然は「四大」という。地水火風。私は、

「聖霊にあつての四大である」

と言います。御霊にあつては、水となり火となり、それから風となり大地となる。

大地は一切のものを荷ないあげているでしょ。どんなものもみんな引き受けてしまふではないですか。

「それはいかん、これはいかん」

なんてやってない。もの凄い力をもっている。どんなビルディングだって平ちゃらです。そのかわり、大地が揺れたら、みんなひっくり返つてしまふ。日本は素晴らしいこの真理を表している国ですよ。地震があるから(笑)。地震よりかもっと凄いのは、この「霊震」というやつ。霊が震う。この霊震は誰が起こすかという、あなた方が起こす。

「我は霊震者なり」

という。この御霊の震動を起こすようなことになかったらば、動けないです。地震・霊震という。

この地水火風の風は、「プニューマ」であり「ルーアツハ」である。気ですから。大気。「元気を出せ」なんていう。本当の「元気」はキリストの気です、元の気は。

それから、火。聖霊は火のごとく、使徒行伝の最初にあるごとく。また、キリストは、

「風のいづこよりきたりて、いづこへ行くか知らざる如く、御霊の世界はそうだよ」と。また、水のごとく。

「これは聖霊のごとである」

と、ヨハネ伝7章に書いてあるとおりの。水と火とはあい容れないかと思うと、どっこいそうではない。ある時は火となり、ある時は水となる。



そういう自在な大自然のような魂に、この聖霊の世界に入ると、なれるんです。風を見れば風となり、木を見れば木となり、花を見れば花となる。これが本当に花を見ている人ですよ。何を見たって、外から観察しているのではダメですよ…(異言)…。私は、だから、この自然が楽しくてしょうがない。生命が通っているから。星を見れば星ともなります。太陽を見れば太陽となります。

「心に太陽を持って」

なんていう言葉があるが、私たち自身が太陽となる。「天地正大の気」という藤田東湖の素晴らしい詩があるでしょ。私はあの詩の前半は大好きなんだ。

「天地正大の気」

粹然すいぜんとして神州しんしゅうに鐘あつまる

秀なでては不二ふじの獄がくと為なり

巍ぎぎ々として千秋せんしゅうに聳そびゆ

注たいでは大瀝たいえいの水と為なり

洋々はつしゅうとして八州めぐを環めぐる」

という。ああいう素晴らしい表現をしたのには驚いたね。この藤田東湖の本当のあの詩のころを知るものはやはり、この御霊の福音を持ったひとです。でなければ読めない。また、藤田東湖もびつくりしているよ、

「あ、そういう読み方をしているか」と。

● 焦眉の問題は聖霊が今欠けていること

「在天の我らの父よ」

という、この「父」というのは、そのようなわけで、私たちが本当に

「お父さま!」

と言って叫ぶるのは、御霊がきてからであります。そうでなくたって、普通みんな言っているよね、この「主の祈り」を。

私は、今から十数年前に一年間、ドイツのハンブルクにいましたが、ルッター教会に毎日曜日ほとんど通っていた。熱心な日本人だと思ったでしょうね。ところが副牧師が私に——私がドイツ語をしゃべれるものだから——

「あなたはいっぺん聖書の時間をやってくれませんか」

と言うから、私はしゃべった。そうしたら、「またやってくれ」と、とうとう数回になってしまった。

「どうして、そういう心境になりましたか」

と、向こうがびつくりした。キリスト教の逆輸入というわけです。



「結局、今欠けているのは、焦眉の問題は、聖霊が今欠けている」ということです。私は教会新聞に「聖霊のバプテスマ」という題で一筆書きました。そうしたら、

「日曜の礼拝をやってくれ」

と言う。「ええ、やりましょう」と。そしたら、正牧師が

「あれは洗礼を受けているか」

と。私は洗礼は受けてない。私は本当の洗礼は受けている。水のバプテスマではないよ、聖霊のバプテスマを受けている。そんなことを言ったってわからない。教会で洗礼式に与っているかという意味で、

「洗礼を受けていない者には壇上に立たせるわけにはいかない」

といって、副牧師がやってくれと言うのに、正牧師が断った、私のことを。

「ああそんならいいよ」

というわけで話しませんでしたけれども。

●幕屋構造

「在天の我らの父よ」

という。「我らの父よ」はもちろん、「わが父よ」ということ。

「わが神、わが父よ」

という、この「神—キリスト—我」との一对一の関係がまず立たなければ、「われら」ということを言っても、それは本当にならない。この「わが神、わが父よ」ということが本当に言えて、「我らの」という複数になります。一般の教会論でいいますと、

「エクレシヤにおいて初めて我々は信仰告白ができるので、単独ではない」

というように言うわけです。では預言者はどうしてくれるのか。預言者はみな単独で神に呼ばれました。パウロにしてもみんなこれは、本当に呼ばれる時は、単独者です。

だから、こういう形(神を頂点としabcの底面をもつ三角錐体)になっている。一人ひとり、このa、b、cが神に直接に呼ばれている。そうすると、これが幕屋になる。この幕屋構造に。即ち、エクレシヤはこの平面(底面abc)だけではなくて、立体的な構造です。

「幕屋」ということを言い出したのは、このことに気がついたから、私が初めに言ったんですよ。そうしたら、手島さんが「それはいい」と言っただけで、「幕屋」と言い始めた。この幕屋ということに靈感をいただいたのは、私が実は病気で寝ている時でした。ヒルティの『眠られぬ夜のために』を読んでいた時に、その閃きがきたときの、日付の所に書いておいたんですけれども。やはり手島さんは、真理には共鳴する人だから。

無教会では「無教会、無教会」と言うから、私が「幕屋」なんて言いだすと、

「ああ、あいつはまたちよつと藤井先生からズレたか」



なんて批判する。実は、私は藤井先生の直弟子で、ズレたのではない。先生の直進のところを更に突き進んでいるだけのなしです。藤井先生は、内村先生が仆れた時に、

「我々は内村鑑三の屍を乗り越えて行く」

と言ったではないですか。キリストが

「汝ら是我よりも大いなる業わざをなす」

というのは、

「お前たちを通して、私はいよいよ大いなる業をするぞ」

ということですよ。キリストより大いなる業ではない。キリストがなしたもう。我々はせしめられているだけのなし。そういうわけでありませう。

●「主よ！」と祈る

「在天の父よ」というけれども、これはもちろん自然科学的な天ではない。霊的な天、霊界の天の「父なる神」ということ。キリストのいちばん簡単な祈りは、

「アッバー」（父よ！）

です。キリストは「アッバー」と言われれば、直ちに父の懐の中にあります。「父よ！」と呼んで一如の世界。祈りの秘訣はこれなんです。私たちは

「主よ！」

と呼ぶ。「主よ」です。キリストは

「こう祈れ、在天の父よ……」

と言ったが、私たちは「主よ」と祈って一向差し支えない。パウロは、「聖霊」と言おうが、「主」と言おうが、「キリスト」と言おうが、「父」と言おうが、これは離すことができない。必ずその奥に二つともあるんです。そういうのを分析的にやっているのがいわゆる組織神学というやつだ。

「主よ！」と祈れば――祈りの極致はこの一言です――あといろんな言葉は要らない。そうしたら、その中に入って、もうそこから根源語の世界に入ると、直ちに異言になってしまう。異言を何も私は奨励しているわけではないけれども、そうやってしまおう。

●南無キリスト

「南無阿弥陀仏」の法然、親鸞――あるいは「南無妙法蓮華経」の日蓮――私はやはり日本の一流の坊さんには本当に敬意を表します。「阿弥陀」「アミッター」というのは「無量寿無量光」という意味だそうです。これは永遠の生命です。無量寿。無限の気持ももちろん持っている。「仏」は「覚者」。それを本当に悟道している、悟入している人。それに「南無」は「帰入」する。私に言わせると、祈入、祈り入る。

「無量寿無量光の覚者」というのは、キリストのことではないですか、私たちにとっては。



無量寿無量光の覚者キリストに祈入する。だから、我々は、「南無阿弥陀仏」と祈ったっていい。「南無阿弥陀仏」と称うと、誤解されるから、そうは言いませんけれどもね。

「南無キリスト」

と、私は時々言う。「南無キリスト」と、私は自分の心の中で時々そう言って祈っている。「南無キリスト」と言うと、もうそれでその中に入ってしまう。

●十字架で私はすつ飛ばされている

「われキリストと共に十字架せられたり」

とは、十字架をこつち側から信じているのではないですよ。

「われキリストと共に十字架せられたり。こんな私なんかもうすつ飛んでいます」

ということですよ。

今の若い人は、自由意志だとか、自主だとか言う。

「その自由とか、自主とかいう、自分というものがなくなってしまうたら、どうするんですか」

なんて、そういう馬鹿げた数学的な考え方をします。ところが、霊の世界は、

「キリストと共に十字架せられて、もう私はない」

ということですよ。これを「無私」という。いわゆる「私心のない」なんて、道徳的に言っているのではないですよ。道徳的にいったら、無私なんていうのは、とても大変なことです。そんな虫のいいわけにはいきませんよ。無私というのは、

「われキリストと共に十字架されて、われ生く、されどわれにあらず。キリス

トが私の中で生きていらっしやる」

「本当に十字架ですつ飛ばされて、私なんていうのはありません。私は生きています

よ、だけれども、もう私ではない。私が今生きているのはキリストだ」

と、パウロは言った。もちろん、パウロは人間ですから、最後まで罪びとにすぎない。けれども、そんなことはもはや問題でない。自分を顧みれば、「罪びとの首」である。キリストを見れば、もうそんな「罪びとの首」なんかすつ飛んでいってしまう。そういう、自分がなくなつて、本当にキリストが生きている。まあ相変わらず私は、相対的な人間小池はダメに相違ない。けれども、そのダメなやつをしょつちゅう押ししては進んで行くものがある。それが御霊の「われならぬわれ」というものです。

●根源現象

キリストは、

「私は何もできな

と仰ったではないですか。



「我何ごともなしあたわす」

と、ヨハネ伝に書いてあるとおり。

「私は何もできない。私は何も教えない」

と。キリストは、神さまが「言え」ということを言っている。神さまの「言え」ということを言っていることは、まあ「教え」といつてもいいですけども。それから、「なぜ」ということをさせられている。

「みんな上からきている。自分は何ものでもない」

と。今度は、キリストは私たちに何と仰ったか。ヨハネ伝14章に、

「我に居らずば何ごともなしあたわす」

とある。「私に居なければ何ごともできない」と言う。

「私に居れば、何でもできるよ」

ということだ、逆にプラスに言う。「私に居れば何でもできる」と。

「そんなことがあるでしょうか」

と。ありますよ。「できる」というと、皆さんは、すぐ現象面を思ってはダメですよ。根源、現象というのがある。根源の現象。根源の現実と現象面がピタリ一つになると、これは神の国です。地上ではいろいろズレがきている。ズレがきているけれども、根源の現象は必ず起きている。それが表面の現象でどのように出るかは、神さまの御意のままだ。だから、病気が癒えるも癒えないも、

「病気は根源的には癒えている。癌は既に治っている」

という。癌の患者であっても、癌がたとえ治らなくても、

「私は治っています」

ということ。その力を持つていけば、神さまはときに本当に現象面にもお現しになる。だから、

「祈りたることは、聞かれたりとせよ」

という。いや、祈ったことは、祈ったこと以上に聞かれております。それで、祈ったことは、あるいは反対の現象が出てくるかもしれない。けれども、それは神さまの本願がそこにおいて現象しているんです、本願が。

「本願を受けとる」

ということが、これがいちばん凶太い信仰で、これはくるいのない信仰になるんです。キリストがまさにこの本願を受けとっていたかたなんです。神さまの本願をいつも受けとっていた。キリストは自分のお願ひもあつたでしょう。けれども、いつも根底においては本願を受けとっていた。

だから、キリストの言葉も、キリストの行為も、言葉と行為とは別なものではないんですよ。口に顯れれば言葉です。キリストの言葉は、



「わが言は靈なり、生命なり」

といって、キリストが言を発すれば、盲人がすぐ目が開いてしまったではないですか。跛者がすぐ立ってしまっただけではないですか。癩病人が癒されてしまった。それは手を按いたことでもあります。けれども、キリストの言葉は靈言であって、力を持っているから、それが行為にあらわれる。いろんな行為がある。口に発しては言葉となり、手足に発しては行いとなる。発するところがちがっているだけのはなしだ。言葉も行いも同じこと。

私が「言行一如」と言うのは、根源の事態から言っている。普通の道徳だと、

「言うは易く、行は難し」

なんていって、いつまでたつても始まらないよ、それでは。

造花は非常に立派にできる。けれども、生命がない。本当の花は、虫がくついても、本当の花は生きています。だから、虫が食ったような行為であっても、本当の世界から発しているところの、御霊の世界から発している行為は生命がある。ところが、外側が整って

「ああ立派だな」

なんていって、それは本当は偽善なんだ。

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

と言ってキリストが怒られたのはその世界。外側は立派だがダメだと。

●茶道の極意の境地

破れ器の中に本ものを受けとれと。八方破れだが、実はスキがひとつもないというような世界。剣道の世界でもそうなんです。何も構えていないんだが、打ち込められないという。これは本当の境地を持っているから。本当の剣は、いわゆる武蔵の二刀流も実は、二刀即一刀である。いや、私に言わせれば、即無刀である。刀は無いんです。もう千変万化の閃きをもっているから、「一刀、二刀」なんていっている世界ではない。そして、相手はそれでもって「参りました！」とくる。

有名な話があるでしょ。四国の大名がお茶の先生をつれて江戸に旅をしてきた。不忍池のそばで剣道の達人が果たし合いを申し込んできた。男としてそれを避けるのは潔しとしないから、

「ちよつとお待ちください」

と言って、近所にちよつと指南番があったから、その道場に行って、

「実は今、果たし合いを申し込まれたのですが、どうしたらいいでしょう。私は剣の道は知りません」

「あなたは何していらつしやいますか」

「私は茶道の方です」

「そうですか。それでは、あなたは茶道の極意の境地に自分を入れて、そして、大



上段に構えてごらん下さい。もし打ち込んできたならば、あなたがそれで打ち込めば、相打ちにはなりません」

「そうですか、わかりました」

と。それで行って、茶道の極意の境地に入って大上段に構えたら、相手のやつが

「参りました！ お見逸みそれいたしました。あなたはどうかたですか」

「いや、私は何も剣道はしらん。お茶の道をやっている」

と。そこで、その果たし合いを申し込んだ侍がその茶道の門人となったという話です。

●無者

最後の境地はみな一如の世界なんです。信仰は一如の世界。だから、パウロが書簡の中で164回言っているそうだね、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

「われ彼のうちに、彼わがうちに」

というこの言い方。この言い方が彼の書簡に164回出てくるそうだ。「イン」の世界、「中」の世界です。福音の世界はこの「なか」の世界なんです。旧約聖書では、「神と共に」という「共に」という表現が多い。新約にくると、この「なか」になる。なぜ、中になったかというところ、これは聖霊によつてです。聖霊によらなければ、本当に「なか」ということがいえぬ。もちろん預言者はある意味において「なか」に入っていますけれども。

「キリストの中に」

ということです。キリストを信じているのではない。ただキリストに信頼しているのでもない。キリストの中にある。そうすれば、「に信頼する」も、「共に」もみんな出てきますよ。何と言ったっていい。この中心の「中」がなかったら、いくら「共に」といったって、これは結局、苦しくなる。結局、本ものでなくなってしまう。

そういう意味において、いつもキリストは神さまと一つなんです。

「私を見た者は父を見た。私は何もものでもない」

と言った。だから、私はキリストのことを

「無者」

と申し上げるんです。

「私は何ものでもない」

というキリストが、ところが、

「私を見し者は父を見しなり」

と言われた。自分が空っぽになったら、父が充滿してしまつたから、

「父と一つである」

と。本当の実存がそうでしょ。「自分の実存、自分の実存」といつて、自分を考えているう



ちはダメです。無実存の実存ということ。そういう事態になったら、何というかね、風が吹くようです。本当にその世界に入ったら、写真をとったら写らないでしょうね、無者だから。まだ私はそこまでいってませんけれども。

「小池先生を撮ったら、写らなかつた」

なんて(笑)。そうなりたいたいけれども、それは地上では無理だよ。しかし、キリストなんかは写らない。あの山上の変貌あたりになるともう写りはしない。向こうの光の方が凄いから、写真機がどうかなってしまふ。

「汝の御国の来らんことを」

という。ドイツの教会では「主の祈り」をやる。私は「主の祈り」をやらない。ドイツ語を知らないわけではないけれども。副牧師が、

「なぜ、あなたは主の祈りを唱えないか」と聞くから、

「私はそんな形式的なことは嫌いなんだ。私の祈りの中には、主の祈りが断片的には出てきますから、それでいいではないですか」

なんて言ってやった。普通は形式だから、マルチン・ルターが

「主の祈りが十字架に掛けられてしまっている」

と言った。いわゆる空念仏になってしまっていて、しょうがないからと。

「聖名をみだりにあぐべからず」

というから、主の祈りもみだりにあげてはダメですよ。あげるなら、本当にその境地に入ってからです。

「御国を来らせたまえ」

ということはどうして祈れるか。わがうちに御国が来てなければ祈れない。

● 幸いなるかな、霊の貧しき者

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はそのひとのものなり」

という。ルカ伝の方では、

「汝のものなり」

と書いてある。あのところは「汝のものなり」の方がいい。聖書に「その人」とか、三人称で書いてあったら、必ず一人称に直さない——「直さない」というのは「本を直せ」ということではない——読む時に一人称で読まなければダメです、ひとごとで読んでいたら。聖書はドラマですから、いわゆる研究したってダメです。それはギリシア語やヘブライ語を研究なさったって結構です。けれども、究極は研究ではない。これはドラマですから、その聖書の中に自分を入れる。サマリヤの女に自分がなって、井戸端でキリストと会話して、キリストに見抜かれてしまつて、



「あなたは預言者だ。いや、あなたは救い主だ！ みんな来てごらん！」
というようにならなかつたら。

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

という。ところが、人間は霊が貧しくないんだ、みんな。「罪びと」というのはそのこと。霊が貧しくないことです。我執という、我というやつがあつて、みんな我に囚われている。本来は、それはわるくない。我というものをだんだん拡張し伸ばそうとする衝動はわるくはない。神さまはそういうように造っているのだから。我々の意志とか、感情とか、知識欲とか、神さまからいただいているものはわるくはない。ただしその衝動が——神さまから賜った我ではないですか——「賜りたる我」を忘れている。自然の我だと思つていて、賜りたる我は神のものではないですか。また神にお返しするものではないですか。神さまの栄光を現すものではないですか。

財産でもそうですよ。私有、共有といっている。私の有、それから、共産の共有。ところが、忘れてるのは、もうひとつ「神有」というのを、神さまの有というのを忘れている。だから、私有を本当に使うことを知らない。共有を本当に使うことを知らない。本当はその奥に、もうひとつ奥の世界を、神有の世界を持たなければダメだ。

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

というが、私たちは貧しくなれない。キリストは貧しかつた。キリストの言葉はぜんぶ告白ですからね。教えるではない。キリストは自分の体験なさらぬことは、一言も仰らない。キリストは神さまの前に平伏して、自分を何ものとも思つていない。これが「霊が貧しい」ということです。

自分を何ものともしない。そしたら、天国が——キリストにとっては天国は神さまですから——神さまがキリストの中に入ってきた。

そのことをあの山上の大告白の第一言で、私は気がついた。けれども、私はキリストのまねをしようとしたって、まねはできない。だから、仕方がない。キリストの中に入るよ
りかしようがない。

「幸いなるかな、汝、わが十字架によって我執からのけられた者よ、罪ゆるされた者よ」

「罪ゆるされた」というのはそういう我執的存在がゆるされのけられてしまった。

天国即ち聖霊の我、汝の中にあり」

と響いてきた。私は畳みの上に平伏してしまった。御霊に撃たれて。これは私個人の、本
当に一個の体験でした。あの一句がそのように受けとれたらば、即ち、「十字架と聖霊」の
事態がきたら、キリストという御霊が、霊核が入ってきたから、私は即ち霊子にされた。
そういうことになりましたら、もう福音書がみんな読めてしまった。

あれは福音書のカギなんです。あの第一言が読めたら、カギが開いてしまった。そうしたら、



福音書がみんな読めてしまった。なんと楽だなあと。

●三日月即満月

キリストの言葉はどれもみんな私たちは、手離しでは落第です。誰もこれに、御言に沿うことができない。激しいことを言っているから。キリストは水を割らずに言っている。

「こういう場合はこうだ」

なんて仰らない。ぜんぶ断言命法です。学者というのは、

「こういうときはこうだ、ああいうときはああだ」

と、そんな分析ばかりやっている。条件付きなものの言い方をする。キリストは無条件のもの、の言い方をした。いちばん凄いののは、

「汝ら、天の父の全きがごとく全かれ」

と。誰がこれに及第できますか。それをキリストは言っているんだよ。何が福音ですか、これ。できないことはばかり書いてあつて、これが福音だなんて。キリストは困ったもんだね、これが福音だなんて、「よろこびのおとずれ」だなんて。よろこびでなくて、苦しみのおとずれだよ(笑)。

「父の全きがごとく全かれ」

とは、聖霊は完全性をもった霊ですから、私たちは三日月だけれども、必ず満月になることが約束されている。三日月でありながら、満月性を持っている。満つる月は満月性を、即ち完全性を持っているんです、私たちはどんなにダメなものでも。「マイナス99」のやつでも、「1」という完全性を持っている。これが「マイナス99」をやっつけてしまう。数学は、「 $99 + 1 = 100$ 」だよ。けれども、そうではない。これは数学ではないんだ、霊学です。霊学では、この「1」が「99」を必ずやっつけてしまう。地上ではダメだ。けれども、この完全性のゆえにもう完全に救われている。

「救いの確かさ」というのがよく言われているね。けれども、

「私の信仰はまだダメだから、どうもまだ救いの確かさはきけません」

なんて。自分の信仰は、一体いつになったら「確かさ」がくるんですか。キリストは、

「信仰うすき者よ」

なんて仰ったから、

「厚くならなければいけない」

なんて思う。イエスの言葉でも、決して躓いてはいかん。その奥を読まなくては。

「よし、お前の読み方は本当だ」

と仰る。信仰は、相対的な判断をしているうちはダメ。「1から99まで」は本当の信仰ではない。信仰というのは、100%なんです。100%。これが完全性なんです。芥子種からしだね一粒です。

「芥子種一粒の信があれば、この山に向かって動けと言えば、動く」



と。そういう、その信は、御霊を受けとるこの祈りの世界において、三日月が即、満月、三日月即満月です。御霊がきましたから、

「父の全きがごとく全かれ」

「はいっ、私の中には全きものがあります」

ということが言える。だから、福音なんです、よろこびの音信なんです。不可能なことがキリストの中に入ると全部、可能になってくる。現象面でのくらいズレたって、そんなことは心配いらん。質的にそれは根源の現実で現象してしまう。

私たちは、諸々の病にも罪にも根源においてはキリストの力で勝っている。躓いたり転んだりしますよ。

「すみませんです」

とあやまる。けれども、勝っていく。そういう、非常に積極的な福音であります、これは聖霊の世界にこなければダメなんです。

●天道が地路に即する

私は無教会の畑だから言わざるをえないけれども、無教会の信仰というのは、外側は立派ですよ。立派だけれども、人を審く。

「あれは真実でない。あれはどうだ」

とか。そして、なかでもって人間的なゴタゴタをしている。まあ、人間の世界はどこでもゴタゴタはあるけれども、しかし、それではいつまでたっても、十字架のこつち側で、向こう側(聖霊の世界)にならない。全無教会を相手に私はビクともしないですよ。何ともない。これはキリストの福音が私たちの中に生きているから。

一騎当千という言葉があるが、まさに一騎当千の——

「千万人といえども我往かん」

という孔子の言葉もあるが——みな本当の力はそこからきている。どうぞ、皆さんも勇ましく進んでくださいよ。あなた方は、集会の掛け替えのない会員なんだから。

「御国を来らせたまえ」

というのは、御国は、聖霊が来ているから、もう御国の中核が、双葉がちゃんとあるから、必ず来る。20世紀はひっくり返ってしまうかもしれないよ。1999年、ノストラダムスの予言のように。21世紀はこないかなんだかしらん。けれども、神の国は必ず来ます。だから、まさに「遺れる民」なんです。

「Nachlese(ナツハレーゼ)」 「落ち穂拾い」

という言葉がありますが、そこらの落ち穂を拾わなくてはいかん。こぼれている神の民を拾っていく。皆さん一人ひとり伝道者ですから。道を伝える者です。

「道」という言葉が私は大好きだ。日本人は本来、道の民なんだから。茶道、弓道、剣道、



柔道、書道、画道。術ではない。道なんです。道とは、真理が身についているのを道という。だから、本来、日本人はいい道をもっている。師道、孝道という。キリストこそ一番の孝道者だ。最も親孝行なんだ。

「平等」という言葉がまた間違っている。一人びとりは天下一品なんです。キリストは、一人びとりの愛し方はみんなちがう。同じ愛し方をしてないですよ、キリストは。

「あの人はだいぶ愛されているようだが、私はちよつとダメだな」

なんて、そんなことはない。一人びとりは、愛し方の内容はちがう。ある人はえらく患難にあうかもしれない。けれども、キリストはそのところをもつて本当に深く愛している。

だから、キリストの天道が地路に即するんです。「路」は「各々の足」と書く。みんな一人びとりの足で歩いている。人の足で歩いてますか、皆さん。自分の足で歩いている。これを「路」という。自分の足でもって歩いて、この地路が天道と即しているところに本当の実存というものがある。

●聖なる者は熱き愛を持っている

「御国をきたらせたまえ」

というのは、そういうわけです。御国が来ているから祈れる。来ていなければ祈れない。

「聖名が聖として崇められんことを」

と。「聖」「カードーシュ」という言葉はもう聖書を貫いていますけれども、特にイザヤ書です。預言者イザヤが「イスラエルの聖者」と言いました。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍のエホバ」

と、イザヤ書6章。イザヤが召命を受けた時に、あそこが一番のポイントでしょ。イザヤ書57章15節に、いと高き者、聖者が遠くの方にいるかと思つたら、

「聖者は、心の砕けた者の中に、くずおれた者の中に入ってくる」

と書いてある。あれは大事な言葉です。聖者は、聖なる者は人を審くのではない。

「¹⁵至高^{いと}高^{いと}至上なる永遠にすめるもの聖者と^なづくるもの如此^{かく}いい給う、我は

たかき所きよき所にすみ、亦^なこころ砕けてへりくだる者と^{とも}にすみ、謙^{へりく}だ

るものの霊をいかし、砕けたるものの心をいかす。」(イザヤ57・15)

と畳みかけて書いてある。「砕けたるもの」とは、別な言葉でいえば、

「ししようがありません」

と言つて御前に平伏している者。その中に入ってくる。聖なる世界は、ある意味において次元がちがうから恐い。けれども、これが入ってくる。そして、この聖なる世界に変えてしまう。この聖なる者は熱き愛を持っている。冷たくないですよ、この聖は。まちがえないようにしてください。熱き愛を持ったところの聖であります。まるで火のようだね、浄化するのだから。またある意味においては、水の如くにして潤す。



「聖名が聖として崇められる」というように、「聖として」ということ。普通はただ「聖名が崇められんことを」なんて訳してあるけれども、これは

「聖名が聖として崇められんことを」ということ。本当は直訳すれば、「聖とされんことを」でもいいけれども、この聖なるものが実は、救済をもたらすものである。たとえばコリント前1章30節に、

「汝らは神に頼りてキリスト・イエスに在り、彼は神に立てられて汝らの智慧

と義と聖と救贖とに為り給えり。」(コリント前1・30)

「聖と救贖」ということが対句のようになって書いてある。それからイザヤ書には、

「聖なる者が救う」

ということがよく書いてあります。即ち、聖者は即ち救う者であり贖う者である。救贖する者である。審く者ではない。これが聖書におけるところの聖者です。

キリストは聖者でありますよ、まさに。神の聖者です。ところが、遊び女や取税人や癩病人や、精神的また肉体的にいろいろな人たちに、近づいてきたではないですか。傷つける者に近よる善きサマリア人のお話のとおり。ところが、祭司や学者やパリサイ人なんてのはそこから遠ざかっている。

「あれは汚らしい」とか言うて。

私はある時に無教会の伝道者と池袋を歩いた。あそこらには街の女がいたよ。そしたら、その人が「汚らしい」と言った。ああ無教会の角度はやはりそうだなと思った。そうじゃない。ああいう人たちの中に実は純情な魂がある。

●聖霊のバプテスマ

「小なる隠者は山に隠れ、大なる隠者は街に隠れる」という。大隠者は町に隠れる。

こういう話もある。お釈迦さんの弟子の文殊——夏に講習会をやったところが——文殊がどこかへ行行って見えない。他の弟子が

「あの文殊のやつは紅灯の巷に行つて遊んできやがった。悪いけしからん野郎だ。

お釈迦さん、あれを咎で罰していいか」

「うむ、そうか。それならまあやつてごらん」

と。お釈迦さんは知つてたか知らないかしらんけれども。文殊を捕まえてこれを打とうとしたら、打とうとした筈が動かなくなった。文殊は実は、紅灯の巷に行つて、救いを施してきたわけだ。そのうちに、そこに環座していた者たちが——

「並居る者ごとごとく文殊となれり」

と書いてある——文殊を見ているうちにみな文殊に化せられてしまったという。仏の霊が



文殊に化体していたわけです。

本当の福音の聖者はそういう角度で、人の隔てはしない。太陽のごときものです。

「神は、直き者にも直からざる者にも、正しき者にも正しからざる者にも、雨を降らせ、陽を照らす」

という。みんな恵みがきている。ただし、恵みを受けるか受けないかというだけのはなしだ。神さまの恵みは、

「あいつは悪いやつだから、少し陽の光をうすくしておこう」

なんてなさらない。どんな者にもみんな同じように照らす。これを本当に受ければ、化せられていくのに、受けないからいけない。いちばん大事な福音を、

「それだけはまあいりません」

と、文化文明はみんなそうでしょ。これは牧師さんたちにも少し責任があるよ。御霊の世界にないのが伝道したって、これは困るよ、正直。いわゆる神学校を出たから伝道者になれるというものではない。いわゆる洗礼、浸礼をしようが、水のバプテスマではダメ。聖霊のバプテスマを本当に直かに受けとっていないかぎり。

私が無教会に対してどうしても言わなければならぬのはその一点です。そこで次元が違ってしまった。内村先生は素晴らしい先生です。けれども、使徒たちに比べればとてもまだまだ。私たちはどんなに小さな人でも、質的には使徒と同質の世界にきている。いよいよ限りなく行こうではないかというはなしです。それを足踏みして、

「あの霊的な妙な祈りをしたり、異言の出るやつはちよつとあれはおかしい」

なんて。それでは、どうしてくれるんですか、聖書は。まず

「使徒行伝も、パウロの書簡もおかしい」

と言うならいいよ、はなしは。けれども、これを何かもつたいぶって受けとっていないながら、こつちはいけないと言うんだから、話は分からない。どうぞ、そういうことでありますので、皆さんは何も恐れることはない。本当の世界に入れば一人で、何人こようがみんなこれをしよつちやう。

●御意を私を通して成してください

「汝の御意を成し給わんことを、天におけるごとく地においても」

と。これは主の祈りの、ある意味において、中心です。主の祈りには、二つ中心がある。楕円の二中心みたいに。キリストは自分の気持も、もちろん人間だから、私たちと同じように持つておられた。ゲッセマネの祈りでも、

「この苦杯はなんとかして止めてください。けれども、私の気持ではない。あ

なたの御意が成るように」

と。十字架にかかる前の、もう乾坤をかけての祈りです。あの祈りでキリストが負けたら、



十字架にはかからない。もちろん、ガリラヤの方から南に向かうときには、もうその覚悟で来ていらつしやつたのではありませんけれども。

「聖意の成らんことを」

と、キリストはここで

「どうぞ私を通して」

と仰らない。それだから、普通そのことを三人称的に考えて、「御意が成りますように」といつて祈っているだけです。では、自分をどうしてくれるんですか、自分を。

「御意を、どうぞこの私とその御意に関わって、私を通して成してください」

と。この「私を通して」ということを仰らないが、キリストの「御意を成し給え」は、この御言の奥に、「我を通して」という言葉が隠されています。提身している。身を提している。私は註解書でそういうのを見たことがないな。

「どうぞ、私を通して成してください」

と、自分を投げ出している祈りなんです。キリストは提身して、その提身は同時に神の中に入ってしまう。神の中に提身しているんですよ。「どうぞ、成してください」と言っ、祈りながら彼は神さまの中に自分を入れてしまっているわけです。

●魂はキリストの靈気を吸って生きている

皆さんは今、どこにいますか。空気の中にいるでしょ。空気の中にいることを自覚していない。また、空気を吸っているでしょ、寝ても覚めても。これは気ですよ、気の世界。この大気という気。私たちは大気に囲まれ、大気を吸って、我々の肉体は生きている。我々の魂は、キリストの靈気を、御靈を吸って、御靈に囲まれ、御靈を吸って生きている。そのことにハタと気がつかなくてはいかん。あの詩篇139篇にあるとおり、

「どこへ行って、あなたの御前を離れることができますか」

という。だから、もうごまかすことはいけませんよ。自分があるがままを投げ出して、

「こんなダメなやつですが、どうぞお使いください」

と。

「もう少し勉強してから、もう少し実存がよくなってから、もう少し聖書の研究が

よくなってから、お使いください」

なんて、いつになったらよくなるんですか。

「もう今、即刻、どうぞ」

と。毎日がそのような提身なんです、実は。だから、

「御意をこの私を通して成してください」

という祈りが最も激しい祈りです。自分を投げ出している祈りですから。自分を投げ出している祈りが最も力強く、その内容がかかっている。何かなしたいお願いがあれば、遠慮



なくお願いしてください。もう自己中心でないですから。

「試験に及第したいです」とか。

私の集会に前にいた人で、まあ今でも交わっていますけれども、祈りの深い青年があつた。お母さんが癌にかかった。彼は東京にいたから、名古屋の病院へ、お母さんの看護に行った。お母さんのために祈りだした。そうすると、明日は体温が何度になる、と示される。その通りになる。按手して、癌が治ってしまった。そのお母さんはそれから20年くらい生きていらつしやつたかな。彼が帰ってきたら、翌日は試験です。二週間、お母さんのために祈つたから。翌日は試験で、さあまだ準備ができていないというわけだ。それで今度は本を開いて、

「神さま、助けてください」

と祈った。読んでいるとパツパツと示される。あつこれは大事なところだと。翌日、試験で一番ですよ。その人からその話を聞いた。

神さまは、本当の歩き方をしていれば、いざとなれば助けてくださる。崖から落ちた瞬間に、「主さまー」と言ったら、怪我をしなかったと、そういう話も聞いています。

とにかく、もう「キリストと一つ」ということが普段の生活の中で本当にならなくては。電車に乗って吊り革につかまって——人の顔なんか見ている必要はない。

「戸を閉じて祈れ」

というなら、目を閉じれば戸を閉じたことになる——目を閉じて、雑音なんかきかたつていいよ、そんなものはどうでも。そして、

「主さまー」

と、祈りの世界に入る。降りる時にはもう力がついてしまっている。まあとにかく、自在なことになります。

今の労使の問題、学校の問題はみんなこの一番奥のことが欠けているから、欠乏に耐えることをしない。すぐ経済要求、賃金問題。果たすべき責任も果たさないでいる。まあ日本はどうなるんですかね、正直。私が学校に踏みとどまっている意味は、ある意味においてそこにある。どうしてもこれを言わなければいかん。彼らが聞こうが聞くまいが、私は大胆に言っているんです、正直。もうしようがないです。

● 聖意体現

「御国の天におけるが如く、地上においても」

という。天上においては本当の現実界。プラトンに言わせれば、「イデア」の世界だ。このイデアの世界においては現象している。プラトンは「アナムネーシス」(想起)ということを行いました。即ち、地上において天界を想い出す。即ち、現象界(地上)は本体界の現象界であると。だから、



「本体界において——実相界、といつてもいいですが——その本体界における如くこの現象界、地上においても、どうぞこの私たちを通して、現成してください」

と。これを「聖意体现」と申します。聖なる意志を体でもって現ずる。キリストはまさに完全に聖意体现をして地上を歩かれた。だから、イエスは変貌の山でいきなり天界に——靈化してしまつて、エリヤよりも素晴らしく——入つてしまふことができたんです、もちろん。

けれども、キリストはそれをするわけにはいかなかった。いきなり神さまのところに行きたかつた。けれども、この人類の罪を、滅びをいかんせん。この罪と死と滅びをやつつけるためには、十字架の贖いをもつて、全存在の復活をもつて、聖霊の降臨をもつて——この三つは離すことはできません——成就しなければならぬ。だから、十字架と復活と聖霊降臨はキリストがちゃんともう見通しておられた、切つても切ることのできない事態であつたんです。

「今にお前たちに現れるぞ。その時には私が言つたりしたりしたことが本当に今度は分かるぞ」

と。ペテロは地上でいくらキリストと一緒にいても、またたとえ録音しておいたつて、ダメだよ。キリストは天界から現れて、そして今度は聖霊となつて一人びとりの中に、何人いようが、一なるキリストは無限に現象するわけです。無即無限無量と言つているのはそのことなんです。これが、

「御意の天になるが如く地にも、どうぞ私を通して成してください」といふことであります。

●御意に従つて生きる者を神は飢えさせない

「日毎の糧を今日も我らに与えてください」

と。食糧問題、経済問題。一日一日を本当に生きれば、神さまは助けてくださる。「日毎に今日も与えてください」と。

もちろん、キリストの言葉はアラミ語ですから、ギリシア語ではないけれども。

「ラクダが針の穴を通る方が、富める者が神の国に入るよりも易しい」

という言葉がある。私は、いくらキリストでも、あまり針小棒大な表現の仕方だなど思つていた。エルサレムの古本屋のおやじに聞いた。そうしたら、古本屋のおやじがすぐ答えた。

「あれは、針の穴という、そういう名前の狭い門があつた。そこをラクダが通る方がやさしい、ということですよ」

「ああ、そうですね。それで分かりました」

と。キリストはなにも無理なことを仰らない。また、もうひとつは、

「死せる者をして死せる者を葬らせよ」



とある。これはなかなか深遠な解釈をしているね、みんな。あれもアラミ語をギリシア語にするときに間違えた。

「マッタはミッタに任せよ」

という言葉です。ヘブライ語やアラミ語は母音がないから、それをギリシア語にするときに同じ言葉にしてしまった。「死者は葬儀屋に任せよ」という言葉です。

「死者は葬儀屋に任せよ。お前は行って神の国を伝えよ」

と。なるほど、キリストはなにも無理を仰らなかつた。

「死んだ者は葬儀屋に任せなさい。お前は神の国を伝えなさい」

と。これはアラミ語の研究家が私にそう言ったので、ああそうですかと。まだまだいろいろあるそうです。本当はアラミ語の原典というのがあればいい。もともと素材はアラミ語で語られていたんだから、弟子たちも。ただパウロがこれを当時の世界語のギリシア語で言った。彼ももちろんアラミ語を知っていたけれども。

「日々の糧を今日も私たちに与えてください」

と。本当にそのようにして、御意に従って生きているときに、神さまはこれを飢えさせない。このことは、皆さん、いろいろなことでご体験だと思えます。今はもうかえって物価騰貴に結局、「要求、要求」をしているから、ああいうことになる。ところが、さすがはドイツはちがう。ドイツ人はもつと理性的に、そして国家を中心にものを考える。たとえば、電気なんか、

「これは国のためにならない」

とあって、必要のない電気(電灯)は消す。自分の家の経済ということではない。そういう気持をドイツ人は持っている。今の若いドイツ人はどうか知りませんが、日本人は、国を愛するという本当の角度が出てこないというのは結局そこがちがう。国旗だつてそうでしょ。こんな素晴らしい国旗はないじゃないですか。私たちにとつては、太陽は義のキリスト、愛のキリストの象徴である。ドイツの詩人ゲーテは本当に太陽を愛した。彼は偉大な文学を展開していきましたが、自分を「太陽の子(ゾンネンキント)」として自覚していた。死ぬ時も、

「もつと光を！」

と言った。

キリストに依り頼むときには、決して困らない。藤井武先生は、

「キリストにあつて生きていて、飢え死にするなら、したつていいではないか」

と言われた。藤井先生も本当にそのような生き方をした人でした。先生が死んだ時には、財布の中が空っぽだよな。借金もなければ貯金もない。先生の全集が出たら、子どもさんたちはそれでもつて助かった。信頼のその日暮らし。「信頼、信頼」と藤井先生は言っていました。そのようなことあります。



● 砕けの極致は十字架

「我らに負い目ある者を我らの免したるごとく、我らをも免してください」

と。これが、楯円の二中心といったその一つ。さっきの「聖意体现」と、この「罪のゆるし」。マタイ伝の方は、

「負い目ある者を我らが免したるごとく、我らをも免してください」

と。この「負い目」とはもともと経済的なことに使う言葉だったでしょうけれども、キリストの譬話にもよく出てきます。即ち、

「神さまに祈るときに、相手の罪咎、負い目というものをゆるさないで祈ったって、それはダメだ」

と。あとの方にもういつぺん書いてある。

私たちは手離しでは人をなかなかゆるせない。「あの野郎！」とかいうようなわけだね。そしてすぐ、第三者の批評を試みたり。だいたい、第三者の批評というのは、お互いさま、あまりすべきことではない。よく言うのはいいよ。悪く言うのは、だんだん尾ひれがついてしまつて、それでとんでもない誤解になる。

もちろん、私たちはキリストの十字架で罪の贖いをされて、徹底的にゆるされました。キリストに赦されていて、人を赦せないわけではないわけです。キリストの赦しをもって人を赦す。もうひとつ言うと、人を赦すばかりでなくて、もうひとつ先の世界があるわけだ。とにかくしかし、こっちはゆるしますよ。けれども、相手が逆らっていたら、それをただ「よし、よし」なんてなわけにはいかない。それは本当の親切ではないから。相手が逆らっているときは、まあ放つたらかしておけばいい。ただ、そのときは本当に執り成しの祈りが必要だ。けれども、相手が

「悪かった」

と謝つたら、無条件にゆるす。

「結構です」

と。

「お前はこうだったではないか。まだダメだよ」
なんて言わない。

イエスさまは、どんな人でも砕けてかかつてきたらば——あの福音書でもそうでしょう——そういう魂をぜんぶ全的に受けとつてしまふ。ところが、自分を何ものかとしているのは、キリストはこれを受けとらない。だから、この砕け・平伏しというのが大事です。

ところが、砕け・平伏しも、人間的な砕け・平伏しはまだ大したことはない。それは、結構なことですよ。詩篇51篇の事態は結構なことなんです。

「砕けたる魂をあなたは軽ろしめたまわぬ」

とある。けれども、本当の砕け、本当の平伏しはキリスト自身がなされた。キリストの砕



けを、キリストの平伏しをいただくことが本当の砕けなんです。

「まだ、私は砕けません。私はまだ傲慢です」

とか、そんなものは五十歩百歩ですから。キリストの神さまに対する平伏しと、神さまの前に本当に砕けていたこの心を、砕けを十字架を通していただく。十字架を通して。その砕けの極致は十字架ですから。

「その砕けきらざるお前の砕けを、砕けざる姿を、我執をぜんぶ私が引き受けた」

というのが、この十字架の贖いです。羔羊こひつじとなり、自分自身が大祭司となったのがキリストの十字架でしょ。ヘブル書にそのことが詳しく書いてある。あのヘブル書というのは素晴らしい。ことにヘブル人があれを本当に読んで悔改めなかったらしようがないんだ。ヘブル書9章、10章がその赦しのところであります。

●天然靈然の世界

ところで、ある挿話みたいなものをお話します。これはどこで私は聞いたかちよつと忘れた。しかし、そのままではない。私の創作がその中に入っている。

ある夜のこと、ある旅人が夢をみた。天使が現れて、

「明日あなたは一日のうちで最も美しいことを私に次の夜に話してくれ」

と。その旅人は

「ああ、いいです」

と。目を開けたら、旭日あさひが昇ってきた。

「ああ、美しいな。これが一番かな」

と思った。朝日を浴びて、草の葉の朝露がキラキラと輝いた。

「これはダイヤモンドもかなわない。七色に光る朝露を見て、これが今日出合った

一番美しいことかな」

と思つて、また歩いて行つた。今度は、お花畑に出ました。

「いや、まずきれいな野原だな」

と。もうそこを動くのがいやになつてしまった。川辺にきたら、美しい女の人が裸で湯浴みしていた。女性の美というものに今度はうたれてしまった。

「神さまの創造でいちばんこれがきれいだな」

と、またこれでちよつと心が動揺してしまった。畑に出たら、畑で裸になつてたくましい男が一生懸命で働いている。

「これも素晴らしい姿だ。この男性美の方が上かな」

と。夕方になったら、子どもたちが歌を歌いながら家に帰つて行く。なんとも可愛らしくて、

「これは何とも他のものとは代えることのできない美しい光景だな」

と、これにまたうたれた。素晴らしい日ですよ、いろんなものでつくわして。陽は青山に



春うすづつきまして、うす暗くなってきた。路端に泣いている男がある。そして、「どうぞ、私のこの罪をゆるしてください。もうどうにもなりません」と言つて、本当に男泣きに泣いている人を見て、人間の心の、罪のゆるしを求めているその姿にうたれた。心の世界のこの姿にうたれて、これが結局、

「私たち人間にとっていちばん感動的なのはこの姿だ。他の美しさも美しいのだが、しかし、この砕けた心の姿に自分はいちばんうたれた」

と。そして、その旅人はうたれた同時に、この男が気の毒になり、

「どうしたんですか」

と言つて、その疲れ切つた男を背負うようにして旅籠屋はたごやに連れて行って寝かしてやった。夜、天使がまた現れて、

「あなたの、いちばん美しいものは何でしたか」

「いろいろあつたが、最後のこの男の罪の赦しを求めている姿が、私はいちばん美しいと思つた」

「そうですか、それからどうしましたか」

と。旅人は、その男を旅籠屋に背負つて行つたことを話した。そうしたら、天使が言いました。

「いちばん美しかったのはあなた自身ですよ」

と。罪に泣いていた疲れ果てた人を背負つて、旅籠屋に連れて行ってやった、そのあなたの愛の行為が一番美しいんだと。こういう話です。

「ゆるしたることく、ゆるしたまえ」

という、この祈りの先に、主さまは仰らなかつたけれども、この善きサマリヤ人の事態。ゆるすばかりでなく、本当にそれを荷ない、それを愛するところの事態。これが聖霊の世界で来ます。だから、この主の祈りの奥にもうひとつ隠されている。キリストは仰らなかつたが、仰らなかつた最後のいちばん大事なものの、この真理は隠されている。現された真理の奥に、隠れた奥の真理というものがある。ゲートルは言いました。

「言いたいことがあつたら、いちばん言いたいことは言わないで。それは、聞いている人が自分で発見するようにしろ」

と。この天使は、自分が善きことをして、愛をしても、それを自覚しなかつた、その旅人の姿をいちばん美しいとした。キリストが、

「お前は私に水を飲ませてくれたね」

「いつ、飲ませましたか」

「いや、いと小さき者に水を飲ませるのは、私に飲ませたのだ」

そういうのが天国の天国人であると。あのマタイ伝25章にあるように、山羊と羊とに分けたあの事態。即ち、もはや善をも、愛をも意識しないような愛の世界。天然靈然の世界



という。天的自然。靈的自然。靈然の世界。この靈然の事態に本当に入ったときに、これが本当の天国人の姿だね。

●全宇宙を庭にしているような気持

主の祈りは、ただキリストはこの一つのサンプルを言われただけで、この一つのサンプルを通して無限に主の祈りは展開していきます。

シユバイツァーが小さいときに、

「この主の祈りの中には、可哀相な動物のために祈っていませんね」

と云って、

「可哀相ないろいろな動物を、どうぞ神さま、あわれんでやってください」

という祈りを主の祈りに付け加えたそうだと。彼の自叙伝の中に書いてある。

福音は、ヨハネ伝の中に書いてあったでしょ、

「キリストのしたこと、仰ったことは、盛りきれないんだ」

と。「それは聖書の中にあるのじゃないの」なんて、くだらないことを言わない。御霊の世界は、聖書は、無限の書ですから。その奥からいろんなものが響いてくる。それを私たちは自在に読みとっていく。聖書の解釈は、昨日と今日でちがってくるんです、どんどん。カトリックの方では、

「これはこう解釈しなければいかん。これはこうだこうだ」

なんてやってる。プロテスタントでもそう。もうみんな硬化現象だね、あれは。

もつと自在な、無限な、もう全宇宙を庭にしているような気持ですよ。宇宙旅行なんかにも行く必要はない。我々は魂でどこへでも飛んでいく。まあ本当にもう…(異言)…

「万物を我らに賜らざんや」^{たまわ}

とパウロが言いました。その通り。私たちには本当に万物が兄弟、友だちです。まあクリスチャンなんてのは、どうも何とも説明のできない人間であります。

「キリストを持つ者は一切を持つ」

という。パウロの書簡の、エペソ、ピリピ、コロサイは、また雄大なところですよ。牢屋につながれながら、あの盛んなる魂はどうですか。何と云っても、このパウロという人は、もう何とも言えないね。イエス・キリストの本当に証者ですね。

しかし、私たちの大小、人間の大小はどうでもいいですよ。神さまはいろいろに造っているんだから。みんな桜の花だったらどうするか。いろんな花があつて百花繚乱。いろいろな木があつて、たいへん美しい。大交響楽です。ひとつの弦が、響きがなくてもいけない。そのようなくぐあいに、皆さんは一人びとりのつぴきならぬ響きを、存在がその神さまの、キリストの響きとして発する。また一人びとりが虹のように——あれは七色でないです、無限色ですから——無限の色合いを持っている。



人まねはひとつもいらん。神さまは一人びとりを一品につくっている。これを人格という。天下、一品なんです、あなた方一人びとりは。人をうらやむことはひとつもない。

「神さま、私を通して、どうぞあなたが現れください」というわけです。

皆さんの顔はちがうではないですか。まあ双子はだいぶ似ているけれどもね。みんなちがう。何億人いようが、みんなちがう。指紋がちがうというんだからね、これがおかしなものだ、こんな似たようなものが。そのように、神さまは不思議に一人びとりをつくっている。神さまの創造というのは——私は第2巻で芸術のことを書きますけれども——神さまが最大の芸術家ですから、生命的芸術家です。

そういうわけで、まことにこれは豊かな、もう何もいらん。もう豊かでしょうがない。そういう事態がイエス・キリストなので、信仰箇条の中に固めてみたり、神学の中に閉じ込めてみたり、そんなもんじゃありませんから。

パウロさんやヨハネさんが、

「聖書を、お前はそんなに読んでくれたか。私はそんなつもりで書いたのではなかったが、よく読んでくれた」

なんて言っているでしょう。何でもこの聖霊の世界は展開してやまないんです。どうぞ、そういうことですから、聖書はご飯よりおいしいご飯であります。

●神中心、神一切

「また、我らを試みに引き入れ給うなかれ」

と。こういう詩がある。

「風ふけども動ぜず天辺てんぺんの月、雪お庄せども推くだけ難かし潤底かんでいの松」

風がいくら吹いても天辺の月は動かない。雪が庄するけれども谷底の松はそれで屈しない。

この「我らを試みに引き入れ給うなかれ」の「試み」というものには二通りある。「ペイラスモス」という字ですけども、「試練」とそれから「誘惑」と二つある。誘惑はサタンの方からやってくる。試練は神さまの方からやってくる。

「試練は愛する者を鍛える」

とありますから、神さまからくる「試練」の方はいくらきてもいい。ところが、「引き入れ給うなかれ」というのは「誘惑」の方で、サタンのいぎないです。これには、うっかりすると、自分でやろうとしたら負けますよ、サタンには。イエス・キリストが荒野の試みでもって、あの一騎打ちでお勝ちになったのは、キリストは自分の霊力でお勝ちになったのではない。どこまでも、「神さまが」とやっていたんです、キリストは。

「神を拝せよ。神の御意であつて、御利益信仰ではないぞ」



と。

「お前はここから落ちてみる。天使が支えるから」

と詩篇の言葉を使って、サタンが誘惑してきた。

「神さまを試みてはいかん。御意に従うだけののはなしだ。御意に従う。私がかこ

こから飛び下りることが御意なら、神さまは必ずいいようになさる」

と。そういうことで、どこまでも神中心、神一切で、キリストはサタンに勝たれた。御霊

の世界も、霊の世界も、わたくし私したらこれはサタンになりますよ。

「私はだいたい霊的に強くなった。だいたい自信ができた」

なんていうと、そうするとサタンに切り替わる。

旧約のサウロ、あの王様は始めはサムエルに按手されて、

「手当たり次第にやって大丈夫だ」

と言われた。それは御霊によって執り成されて、始めは大丈夫だった。そのうちにダビデに対して妬み起きた。妬み、嫉妬の気持が——妬みというのは、へたすると女性に多い。争いは男性に多い。この妬み・争いというのはいかん——そうすると、もうサウロの霊がサタンに切り替わる。

霊の世界は霊の世界に挑んでくるからね。だから、使徒たちよりも先に、きちがいについていたところの霊が

「あなたは神の子だ」

と言った。そしたら、キリストは

「私をあらわすな」

と。他の人にはわからない。ところが、霊的なやつはわかるんです、キリストが神の子であることが。だから、「我をあらわすな」とキリストが言われた。霊的になってくると、霊の作用が激しくなってくるから。その時に、自分の霊力で手離しでやったらいかんです。どこまでも平伏しです。

●一極絶対

しかし、イエス・キリストは最高の霊ですから、あなた方はキリストに本当に魂をこめて祈れば、ひとつも恐いことはない。必ず勝ちます。

「み言の一言、彼(サタン)をば倒す」

と、ルターの宗教改革の讚美歌にある。「十字架!」とか、「キリスト!」とか、そう叫ぶとサタンは逃げてしまう。これは「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」と同じことです。誘いに遭ったらば、心の中でキリストを称える。いわゆる

「自分の信仰で勝とう」

とかいうことではない。即、「主さま!」の一言。それでキリストと一つになってしまうから。



向こう側ではダメですよ。「主さまー」と言う時に——さつきから申し上げている——祈り入らなくてはいかん。キリストの中に自分を投げ入れなくては。そうしたらば、グツと力がもう働いて、それで勝利がきますから。力強い真理というのは簡単明瞭です。皆さんはいろいろ、お悩みの方もあつたようですが、何もいりませんよ。

「どうなったっていい。どうにでもなりやがれ」

と。それで、「主さまー」とやっついていけば、知らないまに道が開けていく。行き詰まったと思つた時に豁然と開かれていく。それをぜひ体験してください。主の中にあつて負けることはひとつもないですから。そしてもう、目の色が変わってくる、顔色が。女のひとはみんな美人になる(笑)。心の美しい、魂の美しいことが本当の美です。私の今度の第二巻(『芸術のたましい』)にも美のことにその角度から書いてある。

いろんな誘惑に遇うよ、こういう世の中だから。いろんなことにあうけれども、しかし、この御霊の世界に入ると、いくら誘惑の風が吹いても、誘惑の圧力がきましても、それでビクともしない。自分が弱いようだけれども、

「われ弱きときに強し」

と、パウロが言つた。そのようなわけであります。弱さに徹すればいいんですよ。弱さに徹すれば本当の強さになる。これが本当の「一極絶対の世界なんです。

● 自分自身が聖書になって天国へ

「我らを悪しきものより救いだしたまえ」

「悪しきもの」というのは——この場合は二通りの解釈があるでしょうけれども——「悪しき事態」もあるけれども、「悪しきものサタン」です。「サタンから救ってください」と。

「今日の糧をください」

と。「一日一生」ですよ。内村先生の言葉だが、一日を一生として生きる。

「江戸っ子は宵越しの銭を使わない」

というけれども、その日その日暮らして——何も貯金しないでもいいというのではない——有れども無きがごとく、無けれども有るがごとくし、すべてこれ神有なりということ。

向こう側にゆくときに、何か持つていきますか。私は聖書だけは持つていきたいけれども、聖書も持つていくわけにいかない。もう聖書は身につけていけばダメですよ。自身自身が聖書になつていなくては、天国へゆくときは。だから、よく読まなくては。私の新約聖書なんていうものもうボロボロでね、頁がおかしくなっている。だいたいおかしくなつていて、マタイ伝なんかどつかへいつてしまった(笑)。

無一物無尽蔵そのままです、キリストの御霊をいただいたから。聖書は本当に、「私は聖書の中でここが好きだ」というなら、そこを本当にあなた方は消化しなさいよ。あるひとつのところをしつかり消化すると、あとはぜんぶグーツと開けていきますから。みんな一



人ひとり、聖書をそのようにして食いついてください。私は暗記できないからね、頭がわるいから。けれども、暗記の好きなひとはどしどし、お経を読むように、ローマ書8章なんかは全部暗記したらいい。マルチン・ルターは言っている、

「ローマ書は本当に熟読玩味、暗記していい本だ」

と。彼の『ローマ書序文』というのは素晴らしい序文です。ルターさんは

「神の言、神の言」

と非常に言いましたが、彼はしかし、御霊のこともはっきり言っている。ルターは、聖霊と神の言を離すことができないんだ、本当は。表面では「神の言」とあまりに言い過ぎたものだから、プロテスタントが

「御言、御言」

と言って、聖霊の面を忘れてしまったけれども。ルターさんは、

「本当の信仰というものは、神さまが私たちを本当に、旧きアダムを殺して、新しくアダムに創造し変えて、一切の思いも何もかも全部これを新たに、しかも聖霊を与えてくださっているのだ。善きことをしようと思つ前に、既に善きことはなされている」

というようなことを言っています。当時のローマン・カトリックの法王に向かつて「ナイン(否)」と言うことのできるのは、本当に命懸けなんです。彼は、フスが焼かれた時に、

「私こそ殉教の死をとげるはずなのに、フスが焼かれてしまった」

と言って、フスのために泣いた。ルターは本当に身を挺して、真理のために戦った。しかし、彼は護られて、そしてワルトブルクの城に匿かくまわれて、新約聖書を訳したでしょ。あれは2か月で訳してしまったんですよ。普段から本当に彼は熟読しているから。12月のクリスマス少し前からやって2月には終わってしまった。約3か月ですけれども。9月にはその聖書が出た。これを「9月聖書(ゼペンバベル)」という。それからあと旧約聖書もぜんぶ訳してしまった。それからドイツ語が自然にできあがってしまったというわけです。

●天界と現実界と地獄界

「聖意体现」ときつき言いました。それから今日を、一日を一生として生きる。

「今日、このように生命を受けたら、もう次の瞬間には死んでもいい」

というのは、死んでも死なないから、「死んでもいい」と言うんです。キリストのところ、本当に生きているから。そういうのがこの「一日一生」ということ。これが現実界。

それから、最後は地獄界。

「この罪をどうぞ、ゆるしてください」

と。そうでなければ、地獄へ入ってしまう。

「神さま、どうぞ、誘惑にかけないでください。そうでなければ、私は地獄へはいらるから」



と。天界と現実界と地獄界が、この主の祈りの中にちゃんと自然におりこまれている。詩篇23篇がそうですよ。

「緑の牧場、憩いの汀」みぎわ

という、あれは天国です。

「聖名のために正しき道に導き給う」
は現実界。

「死の蔭の谷を歩むとも」

と、これ地獄の世界。これをぜんぶ突き抜けて勝利していく。詩篇23篇なんてたった6節だけでも。「わが酒杯」というのは、われという酒杯さかずきですよ。

「われという酒杯さかずきを溢れさせてください、御霊をもって」

と。「いつまでも宮に住まん」ではないですよ、あれは。

「私はいつまでも宮とならん」

ですよ。新約の光で旧約をぐんぐん読み替えて差し支えない。

まあそんなことを言うよ、

「小池なんていうやつは、まああれはデタラメだ」

と。「デタラメ」と言われても何でもいいよ。この聖書の御霊は創造してやまないところの霊だから。

「御国と力と栄とはとこしえに汝のものである。アーメン」

と。本当にそうですね。これは永遠に神の続べ治め給うところ。「バシレイア」というのは、「愛が支配しているところ」ということですよ。なにか「支配している」というと、おっかないようにだけでも、愛が支配している。愛が一切を支配している。本当の力をもって救い上げていくところの力ですから。御国はそういうところですよ。

「栄光とこしえに汝のものである」

と。そしてもう、全生涯がどんなところを通って行っても、讚美、ハレルヤ。讚美が私たちのこの生涯の姿である。そして、ベートーベンの「第九シンフォニー」も、ヘンデルの「メシアス」もかなわんです、このクリスチャンの本当の讚美の声には。そういうわけですから。なんとキリスト者とはさかんなるものであるかなと。神さまはキリストのこのさかんなるもの。もう何とも言えないですね。もう私はだんだん説明するのがいやになってしまいうな。おしまいにします。

